

『八千頌般若』の一切智

—sarvajña, sarvajñatva, sarvajñatā—

渡辺 章悟

はじめに

インドの宗教では、最大の目的である解脱が、常に智慧の働きと結びつけて考察される。その意味では智慧の解明こそが解脱の鍵であるとも言えるのである。その智慧にはさまざまな概念があり、それぞれの宗教は独特の智慧の観念を有しているが、「最高の智慧を持つ聖者は“すべての智慧を持つ者” (sarvajña 一切智者) である」という観念については、おおよそ一貫している。⁽¹⁾ 仏教文献でも最高の聖者が sarvajña 「一切智者」「全知者」であり、その最高の智を意味する語が sarvajñā-, sarvajñatā- 「一切智 [性], 全知 [性]」、あるいは sarvajña-jñāna- 「一切智智, 全知者の知」と言われる。しかし、サンスクリット・テキストにはこれらに対する類語も幾つか見られるし、漢訳語の厳密な対応もいまだ確立しているとは言い難い。

それというのも「一切智 [性]」(sarvajñā-, sarvajñatā-) が大乘に至って三乗思想と結びついて三智に発展したため、一切智の意義と用法が大きく変化したことが最大の原因であるだろう。

大乘の教理から見ると、「一切智」は仏智としての最高の智慧であると同時に、三乗に対応する三智の一つとして、声聞・縁覚二乗の智慧でもある。つまり、初期仏教から用いられてきた仏智という意味と、大乘經典の中で発達した仏智以前の智（二乗の智）という二義である。このような両義を持ちながら、それが同一經典に混在しているため、ややもすると一切智の解釈に混乱がもたらされることとなる。また、そのこと自体

が明確に意識されてもいないため、一切智は三智の基礎という意味で非常に重要な概念でありながら、その理解も必ずしも十全とは言い難く、三智と一切智の再検討が必要と考えらる。

筆者はこのような大乘の智慧の思想を三智を視座に据えながら考察する準備を整えているが、その全体の検討を行なう前提として、大乘の先駆的經典である『八千頌般若』における一切智の類語の用法に限定して、一切智の概念とその展開について明らかにするつもりである⁽²⁾。

I. 一切智の原語

『八千頌般若』とその漢訳諸本の中で一切智に関わる語を検討すると、おおよそ時代を追って智に関する語が次第に増加してゆく傾向が指摘できる。このことは、般若経の中で智慧への思索が次第に深まってゆく経過を如実に物語るものなのである。

実際、『八千頌般若』における一切智の原語に関わるものには、以下の五種がある。なお、括弧（ ）中の数字は使用頻度を示す。

1. sarvajña 「一切智者」(1)
2. sarvajñatva 「一切智者の本質」(10)
3. sarvajñatā 「一切智者性」(約150)
4. sarvajña-jñāna- 「一切智者の知」(34)
5. sarvajñāna 「一切〔智者の〕智慧」(1)

最初の sarvajña は(一切智の)という形容詞、あるいはそれが転化して「一切智者」という仏陀の異名を表わす名詞となったものである。本経でも一切智者として用いられている。

第二の sarvajñatva はこの sarvajña に taddhita 接尾字 -tva を付加したものであるから、「一切智者という性質」を意味する中性名詞であり、第三の sarvajñatā は同じく taddhita 接尾字 -tā を付加した女性名詞である。この両者は Gender の相違以外は同義であって、一切智者の本質、あるいは一切智者の性質という意味である。

さらに、第四の sarvajña-jñāna- は sarvajña に中性名詞 jñāna を加えたものであるから、「一切智者の知」という意味である。第五の sarva-

jñāna- は「一切の知」であるが、おそらく第四の「一切智者の知」のことを述べたものと考えられる。

この中で最も一般的な一切智の原語は第三の sarvajñatā である。この語は現存の AS には百数十例見られる。次いで多いのが第四の sarvajñajñāna の34例で（このうち半数の17例は第二現観 mārgajñatā-adhikāraḥ に見られる）、次に多いのが第二の sarvajñatva の10例である。第一の sarvajña と第五の sarvajñāna は AS にはただ一件のみのきわめて例外的なものである。

しかも、最後の sarvajñāna（一切〔智者〕の知）は、文脈からも、チベット語訳 (thams cad mkhyen pa'i ye shes) から考えても sarvajña-jñāna と見なすべきである⁽⁴⁾。Buddhist Sanskrit Texts Series の中に本経 (AS) を刊行した P. L. Vaidya も、その校訂本で、この語を sarvajñajñāna と修正しているように、W本の書写ミスと考えられる⁽⁵⁾。従って、この語は第四の sarvajña-jñāna に含めて考えてよいだろう。

ただし、sarvajña-jñāna- は「一切智者の知」であるから、「一切智」の原語として厳密にいうならば、sarvajñatā（一切智者性）と、sarvajñatva（一切智者の本質）と、例外的な sarvajña（一切智者）の三つと言うことになる。

ところで、漢訳で「一切智」といっても、その原語が sarvajña(-tā, -tva) であったのか、sarvajña-jñāna であったのか判然としなない。漢訳は訳出年代に八百年もの幅があり、その間の思想的発展が顕著に見られる。このことこそがこの語が AS 系列の経典の内部で発展してゆくことを明示する根拠となる。その状況を明らかにすることは、筆者の今後の課題でもあるが、本稿で扱うのは「一切智」に対応する 1 から 3 までの語とする⁽⁶⁾。

最初に使用頻度の低い第一の sarvajña 「一切智者」と第二の sarvajñatva 「一切智者の本質」とを纏めて検討してみる。

II. sarvajña と sarvajñatva

1. 仏陀の異名

仏教においても一切智者 (sarvajña) はブツダ (buddha), あるいは如来 (tathāgata) の異名として考えられていたが、それを明示する用法が『八千頌般若経』(AS) の中にも指摘できる。それが以下の1) から4) までの例文である。

これらの例文は共通して sarvajñatva 「一切智者の本性」が tathāgata-tva 「如来の本性」などと並記されるが、この形式には AS の唯一の例である sarvajña 「一切智者」も含まれ、残りはすべて sarvajñatva である。なお、sarvajñatva は AS全体で 10 例あるのだが、そのうちの7例がこの形式によるものということになる。最初の例文1) には sarvajñaと sarvajñatva が含まれる。

1) 「しかし、スプーティよ、どのようにして、この般若波羅蜜は不可思議なはたらきによって現われているのかということ (kathaṃ ca subhūte 'cintya-kṛtyeneyaṃ prajñāpāramitā pratyupasthitā), スプーティよ、如来の本性、ブツダの本性、自ら生ずる者の本性、一切智者の本性が、不可思議であるからである (acintyaṃ hi subhūte tathāgatatvaṃ buddhatvaṃ svayambhūtvaṃ sarvajñatvaṃ)。このようにして、スプーティよ、この般若波羅蜜は不可思議なはたらきによって、現われているのである。

実に、これ (はたらき) は心によって思議することができない。それはなぜかということ、それについては、心とか、意志 (思) とか、心理作用 (心所) とかいうものは起こらないからである。

スプーティよ、またどのようにして、この般若波羅蜜は無比のはたらきによって現われているのか。スプーティよ、如来の本性、ブツダの本性、自ら生ずる者の本性、一切智者の本性 (sarvajñatva) は、思議することも、較べることもできない (na śakyam ... cintayitum vā tulayitum vā)。そのように、スプーティよ、この般若波羅蜜は無比のはたらきによって現われているのである。[中略] 如来の本性、ブツダの本性、自ら生ずる者の本性、一切智者の本性 (sarvajñatva) が、無量の (aprameya) ものであるからである。[中略] 如来の本性、ブツダの本性、自ら生ずる者の本性、一切智者の本性 (sarvajñatva) が、無数の (asaṃkhyeya) ものであるからである。[中略] また、どのようにして、この般若波羅蜜は並ぶもの

なきはたらき (asamasama-kṛtya) によって現われているのか。スプーティよ、如来、阿羅漢、正等正覚者、自ら生ずる者、一切智者には等しきものがないのであり (nāsti subhūte tathāgatasyārhatāḥ samyaksambuddhasya svayambhavaḥ sarvajñasya samaḥ), まして、よりすぐれたものは有り得ない。そのように、スプーティよ、この般若波羅蜜は並ぶものなきはたらきによって現われているのである。⁽⁷⁾

この引用文は、「般若波羅蜜は偉大で、不可思議、無比の、無量の、無数の、並ぶものなきはたらきによって現われている」というスプーティの見解に対して、ブツダが認可を与え、さらに「どのようにして、この般若波羅蜜は不可思議等のはたらきによって現れているのかということ、如来の本性、ブツダの本性、自ら生ずる者の本性、一切智者の本性が不可思議等であるからである」云々と解説を加えるところである。

それによれば、如来や一切智者の本性は不可思議で、無比の、無量の、無数の、並ぶものなきものであり、そのはたらきと同じように、般若波羅蜜が現れるのである。いわば般若波羅蜜は一切智者の本性、すなわち一切智に連動しているのである。

また、この引用文の最後には「スプーティよ、阿羅漢、如来、正等覚者、自から生ずる者、一切智者には (sarvajñasya)、等しきものがないのであり、ましてや、[彼らより] すぐれたものはあり得ないのである」としている。この箇所のように、例外的ではあるが、一切智者 (sarvajña-) は、如来 (tathāgata), ブツダ (buddhatva), 正等覚者 (samyaksambuddhatva), 自ら生ずる者 (svayambhū) の異名として用いられる。そして、その本質を表すのが、それぞれ、sarvajñatva, tathāgatatva, buddhatva, samyaksambuddhatva, svayambhūtva という聖者の本質を示す概念である。

以下の2)から4)も、この1)の形式と、おおよそ同一の章句を含む。

- 2) sthaviraḥ subhūtir āha / kiṃ punar bhagavaṃs tathāgatatvam evācintyam atulyam aprameyam asaṃkhyeyam asamasamam evaṃ buddhatvam eva svayambhūtvaṃ eva sarvajñatvam evātulyam aprameyam asaṃkhyeyam asamasamam (p.571, l.14)

- 3) evaṃ caram bhagavan bodhisattvo mahāsattvaḥ sarveṣāṃ śrāvaka-yānikānāṃ pratyekabuddha-yānikānāṃ ca pudgalānāṃ caryām abhibhavati anabhibhūtaṃ ca sthānaṃ pratilabhate // tat kasya hetoḥ / anabhibhūtaṃ hi bhagavan buddhatvaṃ tathāgatatvaṃ svayambhūtaṃ sarvajñatvaṃ // (p.791, l.15)
- 4) tat kasya hetoḥ / anabhibhūtaṃ hi subhūte buddhatvaṃ tathāgatatvaṃ svayambhūtaṃ sarvajñatvaṃ / (p.792, l.2)

以上の1) から4) には「如来の本性、仏陀の本性、自ら生ずる者の本性、一切智者の本性」(tathāgatatvaṃ buddhatvaṃ svayambhūtaṃ sarvajñatvaṃ) という sarvajñatva の並記表現を含むことが共通している。

これらに対応する漢訳諸本を見ると、1)と2)の例はすべての漢訳に対応箇所があるが、3)と4)の例では『道行』『大明度』『小品』という古い訳本には対応箇所が存在しない。

1), 2)を参考にしてブッダの異名を照合すると、サンスクリット本は tathāgatatvaṃ buddhatvaṃ svayambhūtaṃ sarvajñatvaṃ の四種類あるが、『道行』は簡潔に「怛薩阿竭・無師・薩芸若」と訳している⁽⁸⁾。これはそれぞれ tathāgata(tva), svayambhū(tva), sarvajña(tva)に相当するが、この中には buddhatva の漢訳語がない。『大明度』も同様に常に「如来・無師・一切智」と訳す⁽⁹⁾。一方、『小品』は「如来法・仏法・自然法・一切智人法」とし⁽¹⁰⁾、buddhatva (仏法)を含む。『仏母』も「如来法・佛法・自然智法・一切智法」、あるいは「佛性・如来性・自然智性・一切智性」と訳出し⁽¹¹⁾、四つの異名を備えたサンスクリット本に一致する。

一方、『大般若経』では『第三会』「謂諸如来・應・正等覺・所有佛性・如来性・自然覺性・一切智性皆不可思議」⁽¹²⁾、『第四会』「如来・應・正等覺・所有佛性・如来性・自然覺性・一切智性」⁽¹³⁾、『第五会』は「如来・應・正等覺・所有佛性・如来性・自然覺性・一切智性」、あるいは「一切如来・應・正等覺・所有佛法・如来法・自然覺法・一切智法」とするように、サンスクリット本よりもさらに多くの仏陀の別称を規則的に併記する⁽¹⁴⁾。

以上からわかるように、1), 2)によれば、漢訳は訳出年代が新しくなるにつれて、次第にブッダの異名が増加する。また、3), 4)によれば、古い

漢訳にはそれらの相当箇所そのものが見られない。おそらく、羅什訳『小品』(408年訳)迄はこれらの記述は存在しなかったのであろう。しかし、少なくとも、仏性の異名としてのsarvajñatvaは、tathāgatatva, svayambhūtvā と並記され、その最初期の支婁迦讖『道行』(179-180年訳)から認められていた古い学説であったことが確認できる。

2. 修行階梯 (bhūmi) の一つとしての sarvajñatva

以下の引用文は、大乘特有の修行道法を喧伝している文脈であるが、ここにブツダの本性 (buddhatva) の異名として、一切智者の本性 (sarvajñatva) が、修行の階梯の一つとして言及されている。この中に sarvajñatva が二例見られる。

「そのように学ぶ菩薩摩訶薩は、預流果、一來果、不還果、阿羅漢の本性、獨覺の本性、ブツダの本性 (仏性) について学ばない。しかも、これらの階位について学ぶものこそブツダの本性、あるいは一切智者の本性 (一切智性) について学ぶことになる。およそ、ブツダの本性、あるいは一切智者の本性について学ぶものは、無量、無数のブツダの教えについて学ぶのである。」

evaṃ śikṣamāṇaḥ ... bodhisattvo mahāsattvo na srotaāpatti-phale śikṣate na sakṛdāgāmi-phale nānāgāmi-phale nārhattve śikṣate na pratyekabuddhatve śikṣate na buddhatve śikṣate/ ya āsu bhūmiṣu śikṣate sa buddhatve sarvajñatve vā śikṣate / yo buddhatve sarvajñatve vā śikṣate so 'prameyeṣv asaṃkhyeyeṣu buddhadharmeṣu śikṣate / (AS, p.166, 124-p.167, 17)

この文章に対応する漢訳は、以下のようになる。

「菩薩作是學者。為不學須陀涅槃陀舍陀那含阿羅漢辟支佛道。為學佛道。為學薩芸若道。作是學者。為學不可計阿僧祇經卷。」(『道行』)⁽¹⁶⁾

「當作是學。如是學不學溝港頻來不還應儀緣一覺道。作是學者為學一切智出於諸法。」(『大明度』)⁽¹⁷⁾

「菩薩摩訶薩作是學者。為不學須陀涅槃陀舍阿那含阿羅漢辟支佛道。是菩薩為學薩芸若。作是學者為學不可計阿僧祇法。」(『鈔經』)⁽¹⁸⁾

「菩薩如是學者。不學須陀涅槃果斯陀舍果阿那含果阿羅漢果辟支佛道。」

若不學是地。是名學佛法學薩婆若。若學佛法學薩婆若。則學無量無邊佛法。」(『小品』)⁽¹⁹⁾

このサンスクリット文の例をそのまま解釈すれば、預流果、一來果、不還果、阿羅漢の本性という声聞の聖者と、獨覺の本性、さらにブッダの本性(仏性)を順に言及し、さらに「ブッダの本性、あるいは一切智者の本性について」(buddhatve sarvajñatve vā)と並記されるのであるから、一切智者の本性(sarvajñatva)はブッダの本性(buddhatva)の同義語として述べられているのである。漢訳でも『小品』の「佛法を学び、薩婆若を学ぶ」という用法を見ると、両者の区別はないように思われる。

ただし、漢訳諸本のうち、buddhatva に相当する訳語は『大明度』と『鈔經』には見られない。しかも『鈔經』は、「菩薩摩訶薩であって、この学を作す者は、須陀涅槃などの四果と辟支仏などの修行道を学ばない。この菩薩こそが<薩芸若>を学ぶという」のであるから、ブッダの智慧というよりも、より明確に大乘の特色である菩薩にふさわしい智慧として、「一切智」を考えていた可能性がある。求めるべき階位を菩薩とブッダとで明確に区別していたとまでは言えないが、少なくとも、一切智を仏智と同じように大乘の求むべき最高の智慧と考えていたことは明らかである。

なお、サンスクリット本のbuddhatvaなどの階位について、ハリバドラの解釈(AAA)によれば、「これらの階位とは八[人]などの地であり、煩惱[障]・所知障を断滅する区別によって、ブッダの本性、あるいは、一切智者の本性についてという二つが述べられる」(āsu bhūmiṣv iti. aṣṭa-makādi-bhūmiṣu. kleśa-jñeyāvaraṇa-prahāṇa-bhedena buddhatve sarvajñatve veti dvayam uktaṃ.)⁽²⁰⁾と明確に区別する。ハリバドラのいう二つとは、仏性と一切智性ではなく、八人地などの声聞の聖者の位と、仏性と一切智性という聖者の位の区別を述べたものと考えられる。そうであれば、buddhatvaとsarvajñatva は同じ最高位と考えられていたことは明らかである。

このように「一切智者性」(sarvajñatva)は大乘の実践の階位として、仏性あるいは仏道と同義に考えられていた。それは『道行』をはじめとして、漢訳諸本にも見えることから、「一切智者性」(sarvajñatva)は道行

系の初期から最終的な修行階梯として確定していたと言える。

3. 般若波羅蜜の定義としての sarvajñatva

以下の用例は第七章「地獄品」の冒頭で、シャーリプトラ [舍利子] が自身に生じた般若波羅蜜についての見解を世尊に申し上げ、世尊から認可を得るという場面である。それは主に般若波羅蜜の定義を述べる教説であるが、この中に sarvajñajñāna と sarvajñatva と sarvajñatā の三つの語（下線部）を見ることができる。なお、波線については、次節で検討する sarvajñatā の定義と関連するために施してある。

[舍利子]「世尊よ、般若波羅蜜とは一切智者の知 (sarvajñajñāna) を成就するものです。世尊よ、般若波羅蜜とは一切智者の本性 (sarvajñatva) です」

[世尊]「そのとおりである、シャーリプトラよ。まさに汝の言うとおりである。」

[舍利子]「世尊よ、般若波羅蜜は光輝を与えるものです。世尊よ、私は般若波羅蜜を礼拝いたします。世尊よ、般若波羅蜜は礼拝されるべきです。世尊よ、般若波羅蜜は汚されていません。世尊よ、般若波羅蜜は世界のすべてのものによって汚されることがありません。世尊よ、般若波羅蜜は光明を与えるものです。世尊よ、般若波羅蜜は、三界のすべての暗黒を除くものです。世尊よ、般若波羅蜜はすべての煩惱と邪見の暗闇を除くものです。世尊よ、般若波羅蜜は抛り所とされるべきものです。世尊よ、般若波羅蜜は、最高のはたらきをなすものです。世尊よ、般若波羅蜜は、悟りの助けとなる要素 (菩提分法) に幸福を与えるものです。世尊よ、般若波羅蜜は盲目の有情に光を与えるものです。世尊よ、般若波羅蜜はすべてのおそれと悩みを除去する光を与えるものです。世尊よ、般若波羅蜜は五眼を備え、すべての有情に道を示すものです。… [中略] … 般若波羅蜜は間違った道に入りこんだ有情たちを [正しい] 道に導くものです。世尊よ、般若波羅蜜はまさに一切智者性です (sarvajñatā)。世尊よ、般若波羅蜜は、すべての煩惱と所知という障害の習気 (習慣

vāsanā) との結合を断っていることによって、すべてのものを生じさせないのです。世尊よ、般若波羅蜜は、いかなるものをも消滅させることのないものです。世尊よ、般若波羅蜜は生じたものでもなく、滅したものでもないのです。世尊よ、般若波羅蜜は、自分の特徴を欠いていることによって、菩薩・摩訶薩たちの母なのです。… [中略] … 世尊よ、般若波羅蜜は輪廻を対治するものです。世尊よ、般若波羅蜜は、永久不変なものでないからあらゆるものの自性を直観するものです。世尊よ、般若波羅蜜は、ブッダ、世尊たちの三転十二行相の法輪を転ずるものです」(AS, pp.379-380)⁽²¹⁾

上記のように先ず、シャーリプトラは「般若波羅蜜とは一切智者の知を成就するものであり (sarvajña-jñāna-pariṇiṣṭatti), 一切智者の本性である (sarvajñatvaṃ)」という般若波羅蜜の定義ともいえる重要な教説を述べ、これを世尊が是認している。

以下、シャーリプトラの般若波羅蜜についての見解が続く。すなわち、「般若波羅蜜は光輝を与えるものであり (avabhāsakari), … [中略] … 間違った道に入りこんだ有情たちを [正しい] 道に導くものであり、一切智者性であり (sarvajñatā), すべての煩惱と所知という障害の習気 (習慣) との結合を断っていることによって、すべてのものを生じさせないものである」云々といい、最後に「ブッダ、世尊たちの三転十二行相の法輪を転ずるものである」と述べる。

このように、ここには sarvajña-jñāna-, sarvajñatva, sarvajñatā という三つの原語が登場するが、すべて般若波羅蜜との関連で述べられている。

最初の sarvajña-jñāna- (一切智者の知) は、AS 全体では 34 件ある用例の一つであるが、この例では pariṇiṣṭatti が後続する。この pariṇiṣṭatti は change, turn into (変える, 変化する) という動詞 pari-niṣ-PAD から派生した名詞であり、変化, 成就, 完成という意味であるから、prajñāpāramitā は一切智者の知へと変化, 完成 [させるもの] という意義なのであろう。その意味では般若波羅蜜は一切智の本性 (sarvajñatva) とも言えるのである。これが第二の sarvajñatva である。

この語 (sarvajñatva) は AS 全体で10例とわずかであり、後述するよ

うに、原則として敢えて中性の抽象名詞として言及することが必要な場合以外は用いられない。

第三の sarvajñatā は AS で最も一般的な一切智の原語である。この語については次章で検討することにして、上に引用したサンスクリット文に対応するチベット語訳、漢訳諸本を比較してみたい。

まず、一般的にサンスクリット本とよく対応するチベット語訳からみてみる。そこで下線部の一切智に関する三つの原語に対応する箇所だけを、抜き出してみると、

「世尊よ、般若波羅蜜は一切智者の知の成就 (thams cad mkhyen pa'i ye shes yongs su sgrub pa:sarvajñajñāna-pariṇiṣṭatti) なのです。世尊よ、般若波羅蜜は一切智者の本性 (thams cad mkhyen pa nyid:sarvajñatva) なのです」あるいは、「般若波羅蜜は一切智性 (thams cad mkhyen pa nyid:sarvajñatā) なのです」

とある。また、波線の箇所は「般若波羅蜜は、「すべての煩惱と所知という障害の習慣との結合を断っているために、すべてのものは生じないのである」 (shes rab kyi pha rol tu phyin pa ni nyon mongs pa dang shes bya'i sgrub pa'i bag chags dang mtsams spyor ba thams cad spong pa'i slad du chos thams cad mi skyed pa lags so)」となっている⁽²²⁾。このように形式も内容もほぼサンスクリットに一致しているので、テキストの発達段階も成立の年代もおおよそ同時代といつて良い。

続いて漢訳は、これらとは大きく相違するので、煩をいとわず対応箇所をそのまま引用しておく。

『道行』「泥犁品第五」(No.244, 440b)

舍利弗白佛言。般若波羅蜜者多所成。天中天。因般若波羅蜜無不得字者。天中天。般若波羅蜜為極照明。天中天。般若波羅蜜為去冥。天中天。般若波羅蜜為無所著。天中天。般若波羅蜜為極尊。天中天。無目者。般若波羅蜜為作眼目。天中天。其迷惑者。般若波羅蜜悉授道路。天中天。薩芸若者。即般若波羅蜜是。天中天。般若波羅蜜者。是菩薩摩訶薩母。天中天。無所生無所滅。即般若波羅蜜是。天中天。具足三合十二法輪。為轉是般若波羅蜜。天中天般若波羅蜜其困苦者悉安隱之。天中天。般若波羅蜜。於生死作護。天中天。般若波羅蜜。

於一切法悉皆自然。

『大明度』「地獄品第六」(No.245, 487b)

秋露子白佛。明度道弘普入景慧。天中天。自歸明度無極。天中天。行寂無穢去冥示明。巍巍至尊無不成熟。天中天。無目惑者授道慧眼。無生無滅。苦者得安悉入無想。明度慧門大士之母。拔生死根大神已足。三合十二轉明度。天中天。

『鈔經』「地獄品第五」(No.246, 522a)

舍利弗白佛言，般若波羅蜜者多所成。天中天。因般若波羅蜜。無不得字者。天中天。般若波羅蜜為極照明。天中天。般若波羅蜜為去冥。天中天。般若波羅蜜者無所著。天中天。般若波羅蜜為極尊。天中天。無目者般若波羅蜜為作眼。天中天。其迷惑者。般若波羅蜜悉授道路。天中天。薩芸若者即般若波羅蜜是。天中天。般若波羅蜜者是菩薩摩訶薩母。天中天。無所生無所滅即般若波羅蜜是。天中天。具足三合十二法輪為轉是般若波羅蜜。天中天。般若波羅蜜其困苦者悉安隱之。天中天。般若波羅蜜於生死作護。天中天。般若波羅蜜於一切法悉皆自然。(ほほ道行と一致)

『小品』「泥犁品第八」(No.227, 549c)

爾時舍利弗白佛言，世尊是般若波羅蜜。佛言。是般若波羅蜜。世尊。般若波羅蜜能作照明。世尊。般若波羅蜜所應敬禮。世尊。般若波羅蜜能與光明。世尊。般若波羅蜜除諸闇冥。世尊。般若波羅蜜無所染污。世尊。般若波羅蜜多所利益世尊。般若波羅蜜多所安隱。世尊。般若波羅蜜能與盲者眼。世尊。般若波羅蜜能令邪行者入正道。世尊。般若波羅蜜即是薩婆若。世尊。般若波羅蜜是諸菩薩母。世尊。般若波羅蜜非生法者非滅法者。世尊。般若波羅蜜具足三轉十二相法輪。世尊。般若波羅蜜能為孤窮者作救護。世尊。般若波羅蜜能滅生死。世尊。般若波羅蜜能示一切法性。

『佉母』「地獄緣品第七」(No.228, 613b)

爾時尊者舍利子白佛言。世尊。般若波羅蜜多出生一切智智。一切智性即般若波羅蜜多耶。佛言舍利子。如是如是。如汝所說。舍利子復白佛言。世尊。般若波羅蜜多所應敬禮。般若波羅蜜多所應尊重。般若波羅蜜多是大光明。般若波羅蜜多清淨無染。般若波羅蜜多廣大照

曜。般若波羅蜜多攝三界相即三界性。般若波羅蜜多為清淨眼。能照一切煩惱染法。般若波羅蜜多是所依止。般若波羅蜜多是無上法。般若波羅蜜多廣攝一切菩提分法。般若波羅蜜多為大法炬。普照世間一切闇暝。般若波羅蜜多是無所畏。能救一切怖畏衆生。般若波羅蜜多是即五眼。能照一切世出世道。般若波羅蜜多為智慧光。照破一切癡闇等法。般若波羅蜜多為諸導首。引示衆生趣入聖道。般若波羅蜜多是一切智藏。普攝煩惱等障為作斷滅。般若波羅蜜多是無生法無滅法。無起法無作法。般若波羅蜜多自相本空。般若波羅蜜多是諸菩薩母。般若波羅蜜多為諸法眼。照明諸佛所有十力四無所畏。般若波羅蜜多是所依怙。能救一切無依衆生。般若波羅蜜多是安樂法。能斷衆生生死苦惱。般若波羅蜜多能示諸法真實自性。般若波羅蜜多隨順法相。圓滿三轉十二行輪。世尊。般若波羅蜜多有如是等種種功德。

『大般若經』「第三分」「地獄品第十」(大正 7, No.220, 576b-c)

爾時舍利子白佛言。世尊。甚深般若波羅蜜多能作照明。畢竟淨故。皆應敬禮。諸人天等所欽重故。無所染著。世間諸法不能污故。遠離一切三界醫眩能除煩惱諸見闇故。最為上首。於一切種菩提分法極尊勝故。能作安隱。永斷一切驚恐逼迫災橫事故。能施光明。攝受諸有情令得五眼故。能示中道。令失路者離二邊故。善能發生一切智智。永斷一切煩惱相續并習氣故。是諸菩薩摩訶薩母。菩薩所修一切佛法從此生故。不生不滅自相空故。脫一切生死。非常非壞故。能為依怙。施諸有情諸法寶故。能成圓滿如來十力。一切他論不能屈故。能轉三轉十二行相無上法輪。

『大般若經』「第四分」「地獄品第七」(大正 7, No.220, 798c)

爾時舍利子白佛言。世尊。甚深般若波羅蜜多。當知即是一切智性。善能成辦一切智智。爾時佛告舍利子言。如是如是。如汝所說。時舍利子復白佛言。甚深般若波羅蜜多。能作照明皆應敬禮。世間諸法不能染污。能遣昏翳能發光明能施利安恒為上首。與諸盲者作淨眼目。與涉闇徒作明燈炬。引失道者令入正路。顯諸法性即薩婆若。示一切法無滅無生。是諸菩薩摩訶薩母。無依護者為作依護。能除一切生死苦惱。開示諸法。無性為性。能令諸佛具轉三轉十二行相無上法輪。

『大般若經』「第五分」「地獄品第八」(大正 7, No.220, 883b)

爾時佛告舍利子言。如是如是。時舍利子。復白佛言。如是般若波羅蜜多。能作照明皆應敬禮。世間諸法不能染汚。能除翳闇能發光明。能施利安能爲導首。與諸盲者作淨眼目。與涉闇徒作明燈炬。引失道者令入正路。顯諸法性即薩婆若。示一切法無滅無生。是諸菩薩摩訶薩母。能令諸佛具轉三轉十二行相無上法輪。

以上のように漢訳では、『大般若』「第四会」と『仏母』は比較的よくサンスクリット本に対応するが、それ以外はかなり相違がある。特にサンスクリット本は、冒頭にシャーリプトラが、「世尊よ、般若波羅蜜とは一切智者の知の成就であり、一切智者の本性です」と言い、これに対してブッダがそれを認可する場面も存在するが、この部分が『小品』以前の訳では対論形式になっていないし、内容の相違も甚しい。

例えば、最古の訳である『道行』の冒頭は、「般若波羅蜜は多くの成ずる所なり。天中天よ、般若波羅蜜に因って、字（う）むを得ざる者なし」（般若波羅蜜者多所成，天中天，因般若波羅蜜無不得字者）と読める⁽²³⁾。このように、『道行』は対論ではなく、ブッダに対するシャーリプトラの一方的発言となっているし、内容上も sarvajña-jñāna-pariniṣpattir bhagavan prajñāpāramitā, sarvajñatvaṃ bhagavan prajñāpāramitā に対応する訳文とは言えない。また、『鈔経』も『道行』とほぼ全同であることを考えると、『仏母』や『大般若』「大四会」の「一切智性」(sarvajñatvaṃ) を含む最初の節はもともと欠けていたと考えるべきであり、この漢訳には別の原語が想定されよう。

『大明度』はこの二つの訳よりさらに簡潔である。冒頭は「明度の道は広くして、普く景慧に入る」（明度道弘普入景慧）とでも読むのであろうか。この原語は後続の点線で示した「間違った道に入りこんだ有情たちを〔正しい〕道に導くもの」(utpatha-prayātānāṃ sattvānāṃ mārgāvātāraṇi) と近いようであるが、少なくとも現存のサンスクリット本の冒頭箇所には一致しない。

『小品』は舍利弗とブッダとの対論とはなっているが、サンスクリット本とは異なり、この般若波羅蜜が繰り返されるのみで、やはり sarvajña-jñāna-pariniṣpattir と sarvajñatvaṃ については訳されていない。

一方、『大般若』「第四会」はシャーリプトラの言葉として、「爾時舍利

子白佛言。世尊。甚深般若波羅蜜多。當知即是一切智性。善能成辦一切智智」と述べられ、『仏母』も同様に「爾時尊者舍利子白佛言。世尊。般若波羅蜜多出生一切智智。一切智性即般若波羅蜜多耶」とする。これによれば sarvajñatva は一切智性、sarvajñajñāna は一切智智と訳されている。いずれにしても、漢訳では最も新しい二つの訳にのみこの箇所が存在することがわかる。

このように、sarvajña-jñāna-pariṇiṣpattir と sarvajñatvaṃ を含む「地獄品」冒頭箇所に限って言えば、『大般若』「第四会」と『仏母』とチベット語訳以外はサンスクリット本に対応する訳は見いだせない。しかも、同じ玄奘訳『大般若経』「第三会」と「第五会」でもこの冒頭の箇所が欠けていることを考えると、この地獄品冒頭箇所はもともと存在しなかったもので、一切智の概念の発達に伴って、後代（羅什訳以降）に付加されたものと考えらるべきであろう。

なお、『大般若経』「第三会」は第三の sarvajñatā に対応する語は「一切智智」となっているが、「第四会」と「第五会」では「薩婆若」と異なっている。しかも、「第四会」の sarvajñatva の訳「一切智性」と sarvajñatā は訳し分けられることが判る。しかし、『大般若経』の一切智性を含めた sarvajñatā の訳語の区別については、別稿に譲ることとする。

Ⅲ. sarvajñatā (一切智者性) の意義と用法

最後に一切智の最も代表的な用語である sarvajñatā (一切智者性) について、その機能を概説しておく。この用例は AS には百数十例あり、枚挙にいとまがない。基本的には先の sarvajñatva (一切智者の本性) で検討した意義と一致するものが多いが、sarvajñatva と異なり、原則として「ブツダの異名」として用いられることはない。

実際、sarvajñatva が buddhatva, tathāgatatva, svayambhūtvā などと並記されたのに対して、sarvajñatā の形ではこのような並列する用例は見られないようである。ただし、AS 第 26 章に、「彼ら（菩薩乘によって修行する人々）がこれらのブツダの特性を成就され、一切智者性と相応した特性を成就され、みずから生ずる者の特性を成就され、[煩惱によっ

て] 障害されない特性を成就されんことを」(eteṣām eva buddha-dharmāṇāṃ paripūraṇāya bhavantu eteṣām eva sarvajñatā-pratisaṃyuktāṇāṃ dharmāṇāṃ paripūraṇāya bhavantu eteṣām eva svayambhū-dharmāṇāṃ paripūraṇāya bhavantu eteṣām evāsaṃhārya-dharmāṇāṃ paripūraṇāya bhavantu) (W ed., p.829, II.20-22) という例がある。

確かにこれは「一切智者性と相応した諸の特性」(sarvajñatā-pratisaṃyuktāṇāṃ dharmāṇāṃ) と述べているので形式は異なるが、内容上は sarvajñatva と同義と見なされる例外的な並列用法と言えよう。

それでは主な一切智性の用例をあげると、以下の四つになるだろう。

1. 修行階梯 (bhūmi) の一つ
2. 無上正等覚と同義として
3. 法相の一つとして
4. 般若波羅蜜の定義と関連して

最初に sarvajñatva と共通する「修行階梯 (bhūmi) の一つ」としての用法を確認してみたい。

1. 修行階梯 (bhūmi) の一つとしての sarvajñatā

この例の一切智者性 (sarvajñatā) は菩薩が求めるべき階位として、声聞、独覚の二乗に対して用いられる。そのため、仏乗あるいは菩薩乗と同じく最高の階位とされる。sarvajñatva の用例と原則は同じであるが、さらに詳細な教説が説かれている。

- a) 「未来の時に菩薩乗によって修行する人々のうちである者たちは、この般若波羅蜜を聞き、般若波羅蜜を得ながらも、般若波羅蜜を離れ、般若波羅蜜を捨てて、声聞や独覚の階位に相応した諸經典によって、一切智者性を求めるべきだ、と考えるであろう。スピーティよ、これもまた、彼らにとつての魔の諸行である、と知るべきである」(bhaviṣyanty anāgate 'dhvany eke bodhisattva-yānikāḥ pudgalā ya imāṃ prajñāpāramitāṃ śrutvā prajñāpāramitāṃ labdhvā prajñāpāramitāṃ riñcitvā prajñāpāramitāṃ utsṛjya śrāvaka-pratyeka-buddha-bhūmi-pratisaṃyuktaiḥ sūtrāntaiḥ sarvajñatāṃ paryeṣitavyāṃ

maṃsyante / idam api subhūte teṣāṃ māra-karma veditavyaṃ)
(W ed., p.508, 11.11-16) Cf.p.507, 1.14; p.509, 1.27-p.513, 1.24.

- b) 「スプーティよ、一切智者性はこれ（般若波羅蜜）に委ねられ、独覚の階位もこれに委ねられ、声聞の階位もこれに委ねられているからである」(atra hi subhūte sarvajñatā samāyuktātra pratyekabuddhabhūmiḥ samāyuktātra sarva-śrāvaka-bhūmiḥ samāyuktā) (W ed., p.576, 11.10-12)
- c) 「[人々が] 預流果を取得せず、それに執著しないために、さらに一來果、不還果、阿羅漢性という果を取得せず、それらに執著しないために、独覚を取得せず、それに執著しないために、一切智者性を取得せず、それに執著しないために、般若波羅蜜が現われているのである」(srotaāpatti-phalasyāparigrahāyānabhiniveśāya evaṃ sakṛdāgāmi-phalasyānāgāmi-phalasyārhattva-phalasyāparigrahāyānabhiniveśāya pratyekabodher aparigrahāyānabhiniveśāya sarvajñatāyā aparigrahāyānabhiniveśāya prajñāpāramitā pratyupasthitā) (W ed., p.576, 1.26-p.577, 1.4)
- d) 「彼は途中で墮落するにいたり、一切智者性に到達することなく、声聞あるいは独覚の階位にとどまるであろう」(antar evaiṣa vyadhvani vyavasādam āpatsyate 'prāpta eva sarvajñatām śrāvakatve pratyekabuddhatve vā sthāsyatiti) (W ed., 585, 11.1-6)
- e) 「彼が般若波羅蜜と善巧方便を欠いているとすれば、スプーティよ、こう知られるのだ。この菩薩は一切智者性という宝の山に到達しないで、途中で沈み、墮落するにいたり、大きな自分の利益を奪われ、大きな他人の利益という宝の集まりをも奪われてしまうであろう、と。そして、スプーティよ、菩薩にとって途中で沈むとはどういうことか。すなわち、声聞の階位、あるいは独覚の階位に [陥ること] である」(sa ca prajñāpāramitayopāya-kausalyena ca virahito bhavati / veditavyam etat subhūte aprāpta evāyaṃ bodhisattvaḥ sarvajñatā-ratnākaram antarā saṃsatsyati vyavasādam āpatsyate mahataḥ svārthāt parihiṇo bhaviṣyati mahataś ca parārtharatna-rāseḥ parihiṇo bhaviṣyati yad uta sarvajñatā-mahārtha-rat-

nākarāt parihīṇatvād iti // kā punaḥ subhūte bodhisattvasyāntarā vyadhvani saṃsīdanā yad uta śrāvaka-bhūmir vā pratyekabuddha-bhūmir vā) (W ed., p.587, 128-p.588, 17) Cf. p.589, 11.11-13; p.675, 11.15-19.

- f) 「スプーティよ、実にこの無盡をさとることによって、般若波羅蜜への道を追求しながら、縁起を観察する菩薩摩訶薩はだれでも、声聞の階位や独覚の階位にとどまるのではなく、一切智者性にとどまるであろう」 (yo hi kaścit subhūte bodhisattvo mahāsattvo 'nenākṣayābhīnirhāreṇa prajñāpāramitāyāṃ caran pratityasamutpādaṃ vyavalokayati sa na śrāvaka-bhūmau vā pratyekabuddha-bhūmau vā sthāsyati api tu sthāsyati sarvajñatāyāṃ) (W ed., p.881, 11.11-15)

以上のように、階位としての一切智性は、般若波羅蜜の実践、あるいは善巧方便によって得られる最高の階位、目的と考えられていることがわかる。

2. 無上正等覚、涅槃と同義として

以下は一切智性がさとり (bodhi)、無上にして完全なさとり (anuttarā-samyaksambodhi-, 無上正等覚)、涅槃 (nirvāṇa) と同義と見なされているものである。

- a) 「この世間で、世尊よ、如来、阿羅漢、正等覚者は般若波羅蜜について学び、無上にして完全なさとり、一切智者性を獲得し、完全に悟られたのです。」 (ihaiva bhagavan bhagavatā prajñāpāramitāyāṃ śikṣamāṇeṇa tathāgatenārhatā samyaksambuddhenānuttarā samyaksambodhiḥ sarvajñatā pratilabdhabhisambuddhā) (W ed., p.210, 11.2-4)
- b) 「六波羅蜜が知 (jñāna)、さとり (bodhi)、一切智者性、無上正等覚の獲得に (anuttara-samyaksambodhi-prāptaye) 導くのである」 (W ed., p.787, 11.1-13)
- c) 「以上のような仕方では、一切智者性を学ぶ菩薩摩訶薩には、無上正等正覚に対する障害はない」 (W ed., p.816, 11.7-9)
- d) 「スプーティよ、もし菩薩摩訶薩が滅尽 (kṣaya)、不起 (anutpāda)、不滅 (anirodha)、不生 (ajāti)、無存在 (abhāva)、離脱 (viveka)、

無愛着 (virāga), 虚空 (ākāśa), 法界 (dharmadhātu), 涅槃 (nirvāṇa) について学ぶなら, 一切智者性についても学んでいるのである」(W ed., p.817, II.7-11)

以上のように, 一切智性は最高の聖者の智慧, 智慧の本質にして, 涅槃のような最終目標としての意義を持つものなのである。また, それはb) のように六波羅蜜によって導かれるともいわれるのである。⁽²⁴⁾

3. 法相の一つとして

次に, 「法相の一つとして」用いられるものがある。この一切智性 (sarvajñatā) の意義が確定すると, その後は, 般若経の法相化の流れに組み入れられることになる。それは, 例えば「五蘊, 六根, 六大, 六波羅蜜, 三十七菩提分法, 十力, 四無礙智, 十八不共仏法, 預流果, 一來果, 不還果, 阿羅漢性, 独覚性, 仏性, 一切智性が執著され, 執著されない, というように追求しないならば, 彼は般若波羅蜜への道を追求する」(W ed., p.425, I.14-p.426, I.7) というものである。この種の例では, 仏教の善法の後が一切智性 (sarvajñatā) と位置づけられる点が注目される。ただし, 内容上は修行階梯の一つとしての用法と同じである。このような例は他にもある。

「この世間で菩薩摩訶薩は, [十] 力を思議せず, [四] 無畏, [十八] 不共仏法, 一切智者性も思議しない。それはなぜかという、シャーリプトラよ, [十] 力は不可思議であり, [四] 無畏, [十八不共] 仏法, 一切智者性も不可思議であり, すべてのものもまた不可思議であるからである。」(iha śāriputra bodhisattvo mahāsattvo balāni na kalpayati vaiśāradyaṇi na kalpayati buddha-dharmān api na kalpayati sarvajñatām api na kalpayati // tat kasya hetoḥ / balāni hi śāriputrācintyaṇi vaiśāradyaṇy apy acintyaṇi buddha-dharmā apy scintyaḥ<acintyaḥ> sarvajñatāpy acintyā sarva-dharmā apy acintyaḥ)

(W ed., p.478, II.12-20)

ASにこのような例は少ないが, 一切智性もまた, 多くの善法と同様に定着したことを示すものである。

4. 般若波羅蜜の定義と関連して

一切智者性は原則として般若波羅蜜にもとづき、さとの本質と同義で述べられるのを常とする。以下はその具体例である。

- a) 「世尊よ、すばらしい。善逝よ、最高にすばらしい。この般若波羅蜜が菩薩摩訶薩にとって、一切智者性をもたらし、助けるものであるとは」 (āścaryaṃ bhagavan paramāścaryaṃ sugata/ yāvad iyam prajñāpāramitā bodhisattvānāṃ mahāsattvānāṃ sarvajñatāyā āhārikā 'nupariḡrāhikā ceti) (W ed., p.185, II.7-9)
- b) 「一切智者性というものは、これすなわち般若波羅蜜にもとづいて求められるはずだからである」 (W ed., p.245, II.14-15)
- c) 「如来、阿羅漢、正等覺者たちの一切智者性という大きな宝は、実に、この般若波羅蜜の大きな海から生じたものである」 (W ed., p.246, II.8-10)
- d) 「般若波羅蜜は、過去・未来・現在の如来、阿羅漢、正等覺者たちを生んだ、生みの親たる母であり、一切智者性をもたらしものである」 (prajñāpāramitā 'tītānāgata-pratyutpannānāṃ tathāgatānām arhatāṃ samyaksambuddhānāṃ mātā janani janayitri sarvajñatāyā āhāriketi) (W ed., p.870, II.2-4)
- e) 「諸仏世尊たち、および、これ、すなわち般若波羅蜜から生じたものである彼らの一切智者性にも心をそそぐべきである」 (buddhā bhagavantas ... te samanvāhartavyās teṣāṃ api ito nirjātaiva sarvajñatā yad uta prajñāpāramitāḥ) (W ed., p.889, II.22-23)

このように、『般若経』においては、“一切智者性は般若波羅蜜によってもたらされるもの”なのであり、しかもそれは三世の諸仏世尊に共通のものなのである。この不離の関係をさらに詳細に述べたものが以下の第七章「地獄品」の用例である。

本引用は先の sarvajñatva で引用した箇所 (p.157-158 以下) に連続するもので、シャーリプトラがインドラ神に向かって、般若波羅蜜が五波羅蜜の導師であることなどを述べる。この場面で般若波羅蜜と一切智者性の関係が具体的に述べられるのである。

- f) 「カウシカよ、般若波羅蜜と善巧方便に守られた菩薩摩訶薩は、善

行徳目 (puṇya-kriyā-vastu) を随喜の心とともに、一切智者性に廻向して (sarvajñatāyāṃ pariṇāmayāṃ)⁽²⁵⁾、前に述べられた、認識への執著をいだいているかの菩薩たちの、あるいは布施にもとづく福德の累積、あるいは持戒、忍辱、精進、禪定にもとづく福德の累積のすべてに打ち克つのです。この理由によって、私に「上述のような」質問が生じたのです。

カウシカよ、実に、一切智者性への道 (sarvajñatā-mārga) に入るためには、般若波羅蜜こそが「他の」五波羅蜜に先立つものです (pūrvaṅgamā)。カウシカよ、例えば生まれつきの盲人は、たとえ百人であれ、千人であれ、十万人であれ、導き手なしには道を行くことができず、村や都や町に到ることもできません。

それと同様に、カウシカよ、布施、持戒、忍辱、精進、禪定は般若波羅蜜「に伴われること」なくしては、波羅蜜(完成)という名前を得ることはなく、生まれつきの盲人と同じです。導き手がないために一切智者性への道 (sarvajñatā-mārga) にはいることができません。まして、一切智者性 (sarvajñatā) に到達することが、どうしてできるのでしょうか。けれども、カウシカよ、布施、持戒、忍辱、精進、禪定が般若波羅蜜によって守られている時には、波羅蜜という名前を得、波羅蜜という言葉で呼ばれるのです。その時、これらの五つの波羅蜜は、一切智者性への道に入るための、また一切智者性に到達するための眼を持つにいたるのです。(tadā hy āsāṃ cakṣuḥ-pratilambho bhavati pañcānāṃ pāramitānāṃ sarvajñatā-mārgāvatārāya sarvajñatānuprāptaye) (W ed., p.383, l5-p.384, l6)

このように、まず般若波羅蜜が五波羅蜜に先立ってなければならぬ。般若波羅蜜は五波羅蜜の眼として、これらの波羅蜜という完全な実践を制御する。さらに、この五波羅蜜は菩薩の眼となり、一切智者性への道へと導く。菩薩はこの道に入って、一切智者性に到達するのである。したがって一切智者性は、この般若波羅蜜によって実現される究極的なものなのである。さらに、第三章の仏塔崇拜を説く箇所、世尊はインドラ神に向かって、このように述べる。

g) 「如来はこの具体的存在である身体を得ている (ātmabhāvaśarira-

pratilambha)ということによって、如来と名づけられるのではない。実に、如来は一切智者性を得ていることによって如来と名づけられるのである (sarvajñatāyāṃ tu pratilabdhyāṃ tathāgatas tathāgata itī samkhyāṃ gacchati)。カウシカよ、この如来、阿羅漢、正等覚者の一切智者性というものは、般若波羅蜜から生じたもの (prajñāpāramitā-nirjātā) である。そして、如来が具体的存在としての身体を得ているということは、般若波羅蜜の善巧方便として生じている (prajñāpāramitopāya-kausalya-nirjātā) のであり、一切智者の知の拠り所となって (sarvajñajñānāśrayabhūta) 存在しているのである。というのは、この拠り所によって一切智者の知が顕現し (prabhāvanā bhavati)、仏陀の具体的存在 (身体) が顕現し、教えの具体的存在が顕現し、僧団の具体的存在が顕現するのである。

このように、この具体的存在である身体を得ているということは、一切智者の知を原因とするものである (sarvajñajñānahetukaḥ)。[身体は] 一切智者の知の拠り所となっているものだから、すべての衆生にとって塔廟となり (caityabhūta)、敬礼し、恭敬し、尊重し、奉仕し、讃歎し、祈願されるべきものとなっている。そして、このように私が完全に涅槃に入ったときには、これらの身体 (śarīra) の供養がなされるであろう。」(W ed., p.210, l.10-p.211, l.22)

この言明によれば、如来の崇拜の根幹は「一切智者性」である。仏陀は般若波羅蜜を実践することによって「一切智者性」を得た、すなわちブツダとなったのである。⁽²⁶⁾したがって、真の意味で供養されるべきは、ブツダをブツダたらしめた般若波羅蜜、あるいはそれから生じたものである一切智者性に他ならない。引用文ではこれを「一切智者の知」(sarvajña-jñāna) と言い換え、「如来たちの身体は一切智者の知の拠り所となっている」(tathāgataśarīrāṇi sarvajñajñānāśrayabhūtāni) のであり、一切智者の知を原因とするもの (sarvajña-hetuka) とする。

一方、身体はその智慧が依拠する具体的な存在であり、仏・法・僧の三宝そのものが具体的に現われるところである。この意味で身体は一切智と衆生の媒介となる存在ともいえよう。衆生は現に対峙するブツダの

姿や声などの身体性を通して一切智者性に触れたのであり、一切智者性はブツダの身体性をまっけて、初めて歴史的な存在性を得ることができたのである。

- h) 「一切智者性は般若波羅蜜に遍満されているし、如来の遺骨の供養は一切智者性から生ずるのです」(W ed., p.278, II.17-19)
- i) 「このようにして、善男子にしても、善女人にしても、この般若波羅蜜を書き記し、書物の形にして安置するとしよう。[中略]この人こそ、かの二種の善男子・善女人のうちで、より多くの福德を得るであろう。それはなぜかというところ、その善男子・善女人は、一切智者の知を供養したことになるからである。[中略]般若波羅蜜を実践する者は、一切智者の知を供養したことになるからである」

こうしてみると、諸仏が一切智者 (sarvajña, sarvajñā) であることは当然である。なぜなら、諸仏は一切智者性 (sarvajñatā) を得ているためにブツダと名付けられているからである。また、一切智者性とは一切智者の本質であり、それは一切智者の知 (sarvajña-jñāna) に他ならない。一切智者性は般若波羅蜜という智慧によって生み出されたのであるから、一切智者の知ともいわれるのである。したがって、般若波羅蜜は一切智者性であるとも言うのである⁽²⁷⁾。ただしその逆は有り得ない。

般若波羅蜜は菩薩を一切智者性へと導く基礎であり、一切智者性の道に向かう原因である。逆に、諸仏の一切智者性は、般若波羅蜜によって生ずる結果である。このように般若波羅蜜は原因、一切智者性は結果であり、目的なのである⁽²⁸⁾。

むすび

『般若経』以前より一切智者 (sarvajña) は仏陀の異名であり、その本質、本性である sarvajñātva, sarvajñatā は、一切智者の智慧そのものと考えられた。したがって、本経ではそれを sarvajñajñāna とも言うようになった。

既に見たように、一切智者はブツダと同じく理想的な存在であったが、

特に『般若経』では、その理想の境地は般若波羅蜜によってもたらされると教える。そしてその大乘的な境地を、「無上なる完全なさとり」(anuttarā samyaksambodhi)、あるいは「一切智者性」(sarvajñatā)と呼んでいるのである。それではその一切智者の本性へ至るにはどうしたらよいのであろうか。またそれが本当に可能なのであろうか。

この疑問に対して、『八千頌般若』第一章に述べられる一切智者性のはたらきを、経中から引用しておこう。この箇所は、伝統的な仏教を代表するシャーリプトラ長老に対する、スプーティ長老(般若経側)の教説という設定であり、その意味でも般若経の一切智者性への道筋を示したものといてよい。

「五蘊は五蘊としての自性 (svabhāva) を捨て (virahitam)、般若波羅蜜も般若波羅蜜としての自性を捨て、一切智者性も一切智者性としての自性を捨てている。[中略] 般若波羅蜜は般若波羅蜜としての特徴 (lakṣaṇa) を捨て、特徴は特徴の自性 (lakṣana-svabhāva) を捨て、特徴づけられるものは特徴づけられるものの自性 (lakṣya-svabhāva) を捨て、自性は自性の特徴を捨てているのです。[中略] このように学ぼうとする菩薩摩訶薩は、一切智者性に向かってでてゆくでしょう。それはなぜかというと、長老シャーリプトラよ、すべてのものは生じたものでもなく (ajātā)、生じないものでもないのです (anirjātā)。菩薩摩訶薩がそのように追求するとき、一切智者性は彼の近くに来るのです。一切智者性が近づくにつれて、衆生を成熟させるため、心身、外見、仏国土の浄化が近づき、仏陀たちとめぐり会うことにもなるのです。長老シャーリプトラよ、このように般若波羅蜜を追求している菩薩摩訶薩は、一切智者性に近づくのです」(W ed., p.54, l.13-p.56, l.23)

以上のように、『般若経』は、一切智者性を得ることが、般若波羅蜜によってのみ可能であることを説く經典であるとも言えよう。一切智者性は常に般若波羅蜜にもとづく。この構造から一切智者へ至る道はよく見通せる。その意味では単純な教説なのである。

しかし、それではどのように実践するかというと、これはまさに難行である。経によれば、本性に関わるような計らいをすべて捨て去れとい

う。つまり、捨て去っている (virahita) という空の立場で生活し、智慧の実践を行なっている菩薩のみが、一切智者性に向かっているのである。繰り返す実践によって、やがてこの知が確実なものになり、自分に近づくにつれて、衆生を成熟させるために、自己の心身が浄化され、仏国土が浄化され、諸仏の世界に入る。したがって、般若波羅蜜の実践は、間違はなく一切智者への道なのであるという。これが経による回答である。

- (1) このことは、例えばインドの伝統的なヴェーダーンタのテキストである、『シャンカラ註ブラフマ・スートラ』にも見ることができる。Cf. *Brahma-sūtra-Śāṅkara-Bhāṣya*, Ānandāśrama-Saṃskṛta-Granthāvaliḥ, Granthāṅkaḥ 21, Śrīmad-Dvaipāyana-praṇīta-Brahasūtrāṇi, Ānandagiri-kṛta-ṭīkā-saṃvalita-Śāṅkara-bhāṣya-sametāni. dvitīyeyam aṅkanāvṛttiḥ. Śālivāhana-Śākābdāḥ 1822= Khristābdāḥ 1900, p.513. Kumārila Bhaṭṭa's *Śloka-vārttika*, edited & revised by Svāmi Dvārikādāsa Śāstrī, Prācya-bhārati Series-10:Tara Publications, Varanasi, 1978, p.2.111b, 112a, 117a, 135b etc.
- (2) 『般若経』におけるさとの智の展開について、最近、筆者は「悟りへの一瞬の智慧」(『仏教の修行法 阿部慈園博士追悼論集』春秋社, 2003.1, pp. 153-175) を公刊したのでこれを参照されたい。
- (3) R. Keira & N. Ueda ed., Sanskrit Word-Index to the *Abhisamay-ālaṃkāṛālokā Prajñāpāramitāvyaḥyā* (U. Wogihara edition), Sankibo Press:Tokyo, 1998, p.1152 によれば, sarvajñā-jñānaṃ を sarvajña-jñānaṃ と別項にして W 本の p.799, l.8, p.989, l.25 の二例を指示しているが、これは sarvajña-jñānaṃ の誤りである。
- (4) W 本で言うと、sarvajñāna は p.780, l.22 が唯一の例である。これに対応する Tib. 語訳は P ed., no.734, vol.21, Mi 230b7 に相当する。
- (5) V ed., p.194, l.26 を参照。本書の脚註には W 本が sarvajñānaṃ であることが指摘されている。
- (6) なお、R. Keira & N. Ueda ed., Sanskrit Word-Index to the *Abhisamay-ālaṃkāṛālokā Prajñāpāramitāvyaḥyā* (The Sankibo Press:Tokyo, 1998., p.1152) によれば、これらの他に sarvajñātā を sarvajñātā と別項にして

W 本の p.612, l.10 を指示しているが、これは sarvajñatā の誤りである。

- (7) kathaṃ ca subhūte 'cintya-kṛtyeneyaṃ prajñāpāramitā pratyupasthitā / acintyaṃ hi subhūte tathāgatatvaṃ buddhatvaṃ svayambhūtvam sarvajñatvaṃ // evaṃ hi subhūte 'cintya-kṛtyeneyaṃ prajñāpāramitā pratyupasthitā // na hidam śakyam cittena cintayitum // tat kasya hetoḥ / na hi cittaṃ vā cetanā vā caitasiko vātra dharmāḥ pravartate //
- kathaṃ ca subhūte 'tulya-kṛtyeneyaṃ prajñāpāramitā pratyupasthitā / na śakyam subhūte tathāgatatvaṃ buddhatvaṃ svayambhūtvam sarvajñatvaṃ cintayitum vā tulayitum vā // evaṃ hi subhūte 'tulya-kṛtyeneyaṃ prajñāpāramitā pratyupasthitā // kathaṃ ca subhūte 'prameya-kṛtyeneyaṃ prajñāpāramitā pratyupasthitā / aprameyaṃ hi subhūte tathāgatatvaṃ buddhatvaṃ svayambhūtvam sarvajñatvaṃ // evaṃ hi subhūte 'prameya-kṛtyeneyaṃ prajñāpāramitā pratyupasthitā // kathaṃ ca subhūte 'saṃkhyeya-kṛtyeneyaṃ prajñāpāramitā pratyupasthitā / asaṃkhyeyaṃ hi subhūte tathāgatatvaṃ (278) buddhatvaṃ svayambhūtvam sarvajñatvaṃ // evaṃ hi subhūte asaṃkhyeya-kṛtyeneyaṃ prajñāpāramitā pratyupasthitā // kathaṃ ca subhūte 'samāsama-kṛtyeneyaṃ prajñāpāramitā pratyupasthitā/ nāsti subhūte tathāgatasyārhatāḥ samyaksambuddhasya svayambhuvaḥ sarvajñasya samaḥ kutaḥ punar uttaraḥ // (W ed., p.570, ll.1-27)
- (8) 『道行』の1), 2) 対応箇所は「須菩提白佛言。極大究竟般若波羅蜜。不可計究竟。不可量究竟。無有與等者究竟。無有邊究竟。佛言。極大究竟般若波羅蜜。不可計究竟。不可量究竟。無有與等者究竟。無有邊究竟。安隱般若波羅蜜。不可計究竟。怛薩阿竭・無師・薩芸若。是故般若波羅蜜不可計究竟。[中略] 何等般若波羅蜜無有邊究竟。無有邊怛薩阿竭無師薩芸若。是故般若波羅蜜無有邊究竟。須菩提白佛言云何怛薩阿竭無師薩芸若不可計不可量無邊。」(大正8, 450c14, 16, 21, 23) である。3), 4) 対応箇所 (462b) に、この語句はない。
- (9) 「善業白佛言。極大究竟明度無極。無量無與等者。佛言。然如來・無師・一切智。是故明度不可稱量。安隱究竟無與等者。善業白佛言。云何天中天。如來無師一切知無量無邊。」(大正No.225, 492b11, 13) とする。3), 4) は対

応しない。『道行』『大明度』の「無師」はanācārya(-ka)である可能性もないわけではない。例えば、『法華經』の例によれば, apare punaḥ sattvāḥ sarvajña-jñānaṃ buddhajñānaṃ svayaṃbhuḥjñānam anācāryakaṃ jñānam ākāṅksamāṇaḥ (H.Kern and B. Nanjo ed., *Saddharmapuṇḍarika-sūtra*, Bibliotheca Buddhica 10, Osnabrück 1908-1912, p.81, l1) とあり, 自然智と無師智を区分する。羅什の漢訳でも「若有衆生…求一切智仏智自然智無師智(『妙法蓮華經』大正 9, 13b25)となっている。

- (10) 『小品』は1), 2)は「須菩提。云何般若波羅蜜為大事故出。為不可思議事不可稱事。不可量事無等等事故出。須菩提。如來法・佛法・自然法。一切智人法。廣大不可思議不可籌量。是故須菩提。般若波羅蜜為大事不可思議事故出。云何般若波羅蜜為不可稱事不可量事故出。須菩提。如來法佛法自然法一切智人法不可稱不可量。是故須菩提。般若波羅蜜為不可稱不可量事故出。云何般若波羅蜜為無等等事故出。須菩提。一切無與如來等者。何況有勝。是故須菩提。般若波羅蜜為無等等事故出。世尊。但如來法佛法自然法一切智人法不可思議不可稱不可量。」(559a18-b1)となっている。しかし, 3), 4)相当部分は欠けている。
- (11) 『仏母』は1), 2)に相当する箇所は「須菩提。云何為不可稱事故出。所謂如來法・佛法・自然智法・一切智法。如是諸法非心所稱。是故般若波羅蜜多為不可稱事故出。須菩提。云何為不可量事故出。所謂如來法佛法自然智法一切智法。如是諸法出過諸量無有限量是故般若波羅蜜多為不可量事故出。[中略]復次須菩提白佛言。世尊。若如來法佛法自然智法一切智法。如是諸法不可思議不可稱不可量不可數無等等者。」(632b21, 25, 28, c3,7,11)とあり, 3), 4)に相当する箇所は, 「能入佛性・入如來性・自然智性・一切智性。」(654c22, 655a15)とする。その他, 「遠離佛無上智・自然智・一切智・一切智智。乃至遠離阿耨多羅三藐三菩提。」(652a,b,c)と一切智と一切智智を並記する場合もある。
- (12) 大正 7, No.220, 607b7。以下同様の例が「不可思議等品」第十六(607b-608b)と「譬喩品」第十七の冒頭(608c-609a)に頻出する。
- (13) ただし, この例には「一切智性」の代わりに「一切智法」とする場合もある。「謂諸如來應正等覺所有佛性如來性自然覺性一切智性。皆不可思議不可稱量無數量無等等。」(818a16), 同様の用法(818a20, 24, 840c3), 「以諸佛

- 性及如来性自然覺性一切智性皆不可勝。」(840c3), 「一切如来應正等覺所有佛法如来法自然覺法一切智法。」(818b17, 818b17)。
- (14) 「如来應正等覺。所有佛性。如来性。自然覺性。一切智性。皆不可思議。不可稱量。無數量。無等等。」(895b27, 895c2, 895c6)。「如来應正等覺。所有佛法。如来法。自然覺法。一切智法。亦不可思議。不可稱量。」(895c28, 896a9)。
- (15) AS, W ed.の「これらの階位を学ぶものは」(ya āsu bhūmiṣu śikṣate)を, AS, V ed. (p.21, 1.27)では「これらの階位を学ばないものは」(yo nāsu bhūmiṣu śikṣate)とする。
- (16) 大正8, No.224, 430b5-8。
- (17) 大正8, No.225, 483a25-27。
- (18) 大正8, No.226, 513a1-3。
- (19) 大正8, No.227, 541a7-10。
- (20) AAA, W ed. p.167, II.4-6。ここで述べられる煩惱の断滅についての記述は、後述する「地獄品」の sarvajñatva と sarvajñatā との用法を想起させる。それによれば、「般若波羅蜜はまさに一切智者性であり、般若波羅蜜はすべての煩惱と所知という障害の習気（習慣）との結合を断っていることによって、すべてのものを生じさせないものである」(AS, W ed., p.380, II.1-4)とある。この二つの煩惱の習気を断滅するという般若波羅蜜の教説こそ、ここで引用された一切智の機能と一致することをあらかじめ指摘しておきたい。
- (21) atha khalv āyuṣmān śāriputro bhagavantam etad avocat / sarvajñā-jñāna-pariniṣpattir bhagavan prajñāpāramitā / sarvajñatvaṃ bhagavan prajñāpāramitā /
 bhagavān āha / evam etac chāriputraivam etad yathā vadasi //
 śāriputra āha / avabhāsakarī bhagavan prajñāpāramitā / namaskaromi bhagavan prajñāpāramitāyai / namaskaraṇīyā bhagavan prajñāpāramitā / anupalptā bhagavan prajñāpāramitā / sarva-loka-nirupalepā bhagavan prajñāpāramitā / ālokarī bhagavan prajñāpāramitā / sarva-traidhātuka-vitimirakarī bhagavan prajñāpāramitā / sarva-kleśa-dṛṣṭy-andhakārāpanetrī bhagavan prajñāpāramitā / āsrayaṇīyā bhaga-

van prajñāpāramitā / agrakarī bhagavan prajñāpāramitā / bodhi-pakṣā-
 ṇām dharmāṇām kṣemakarī bhagavan prajñāpāramitā / andhānām-
 sattvānām ālokarī bhagavan prajñāpāramitā / sarva-bhayopadrava-
 prahīṇālokarī bhagavan prajñā-pāramitā / pañca-cakṣuḥ-parigrahaṃ
 kṛtvā sarva-sattvānām mārḡa-darśayitrī bhagavan prajñāpāramitā /
 carkṣur bhagavan prajñāpāramitā /moha-tamas-timira-vikariṇī timira-
 vikariṇī bhagavan prajñāpāramitā / sarva-dharmānām akaraṇī bhaga-
 van (171) prajñāpāramitā / utpatha-prayātānām sattvānām mārḡa-
vatāraṇī bhagavan (p.380) prajñāpāramitā sarva-jñataiva bhagavan
prajñāpāramitā / sarva-kleśa-jñeyāvaraṇa-vāsanānusandhi-prahīnatām
upādāya anutpādikā bhagavan sarva-dharmāṇām prajñāpāramitā /
anirodhikā bhagavan sarva-dharmāṇām prajñāpāramitā / anutpan-
nāniruddhā bhagavan prajñāpāramitā / sva-lakṣaṇa-śūnyatām upādāya
 mātā bhagavan bodhisattvānām mahāsattvānām prajñāpāramitā /
 sarva-buddha-dharma-ratna-dātrītvād daśa-balakarī bhagavan pra-
 jñāpāramitā / anavamardaniyā bhagavan prajñāpāramitā / catur-vaiś-
 āradyakarītvād anāthānām sattvānām nāthakarī bhagavan pra-
 jñāpāramitā / saṃsāra-pratipakṣā bhagavan prajñāpāramitā / akū-
 ṭasthatām upādāya sarva-dharma-svabhāva-vidarśanī bhagavan pra-
 jñāpāramitā / paripūrṇa-tri-parivarta dvādaśākāra-dharma-cakra-pravar-
 tanī bhagavan buddhānām bhagavatām prajñāpāramitā / (AS, W ed.,
 pp.379-380)

- (2) D ed. No.12, Ka 96a-97a, P ed., No.734, Vol.21, Mi 103a3-104a4.
 (3) この箇所は『道行』と『鈔經』はほぼ全同である。『道行』の卷第三と鈔經
 の卷第三は基本的に共通である。
 (4) 「諸仏世尊の一切智者性も、六波羅蜜から生じた」という教説は他にもある。
 Cf. W ed., p.786, II.6-18.
 (5) 般若波羅蜜が他の五波羅蜜に先立つものであり、布施等の六つ [の實踐]
 が、一切智者性のほうへ廻向されて、波羅蜜という名前を得るのである、
 ということについては、第三章「無量の功德を持つ塔への恭敬」
 (aprameyaguṇadhāraṇa-stūpa-satkāra-p.)でも「般若波羅蜜によって一切

智者性に廻向された多くの善根が波羅蜜という名前を得るにいたる」
(W ed., p.247, l.3-p.248, l.1) 云々と述べられる。

- (26) 一切智者性を得ることで仏陀となる、という表現については、W ed., pp.84-85; pp.210-211を参照されたい。
- (27) 般若波羅蜜が一切智者性であるという記述もある。この表現については、W ed., p.379, l.5; p.380, l.1; p.822, ll.15-16を参照されたい。
- (28) ただし、次のような表現がある。「カウシカよ、般若波羅蜜に帰命する人は、一切智者の知に帰命するのである。それはなぜかというと、カウシカよ、諸仏世尊の一切智者性は、この「般若波羅蜜」から生じたのであり、逆に、般若波羅蜜は一切智者の知から生じたものである、と明らかにされるからである。」(sarvajña-jñānasya sa kauśika namaskāraṃ karoti yaḥ prajñāpāramitāyai namaskāraṃ karoti / tat kasya hetoḥ / ato nirjātā hi kauśika buddhānāṃ bhagavatāṃ sarvajñatā sarvajña-jñāna-nirjātā ca punaḥ prajñāpāramitā prabhāvyate /) (W ed., p.463, ll.5-11) この例文では、般若波羅蜜が<一切智者の知>から生じたものと「明らかにされる」(Caus. Pass. 3 sg.) (prabhāvyate<pra-√bhū) と敢えて強調して述べている。しかし、ここでも般若波羅蜜を生んだのは一切智性ではなく、一切智者の知であることに注意すべきである。

<略号>

AS : *Aṣṭasāhasrikā Prajñāpāramitā*.

V : P. L. Vaidya ed., *Aṣṭasāhasrikā Prajñāpāramitā with Haribhadra's Commentary Called Āloka, Buddhist Sanskrit Texts Series, No.4, Darbhanga, 1960.*

W : U. Wogihara, *Abhisamayālaṃkāṛālokaḥ Prajñāpāramitāvyākhyā, The Work of Haribhadra*, Sankibo Busshorin Publishing Co., Ltd.:Tokyo, 1973 (1st Pub., The Toyo Bunko:Tokyo, 1932).

<キーワード> 般若経, 智慧, 一切智, 般若波羅蜜, 仏陀の異名